



「彼岸」

恥ずかしながら、私は「お彼岸」の意味や時期を全く理解していませんでした。何なら「どうしてみんなお彼岸の時期を知っているのだろう」と不思議に思うほどで、毎年時期が大きく変わるものだと思っていた自分の能天気さに、今更ながら反省する次第でございます（汗）。

調べてみると、お彼岸は「春分の日」「秋分の日」を中心とした年2回、それぞれ7日間あるそうです。この時期は太陽がほぼ真西に沈み、あの世（彼岸）とこの世（此岸）に思いを寄せ、ご先祖様に感謝するとともに、自分自身を見つめ直す機会でもあるそうです。仏教に由来しながらも、日本独自に発展した風習とのこと。春分・秋分の日を3日前を「彼岸入り」、3日後を「彼岸明け」と呼びます。1週間もあれば、だいぶ自分を見直せるのではないのでしょうか…。ちなみに、ここまでの内容は一般的には当たり前の知識なのに、あたかも新しい情報として皆さんにお伝えしております（笑）。

私がふくろうの郷の施設長になって、今年で3年目を迎えました。入職した頃は何もわからず、職員が交わす専門用語を一つずつ覚えながら、「法人とは?」「施設経営とは?」と不安ばかりの毎日でした。今となっては…と言いたいところですが、未だに周囲の皆さんに助けられながら、何とか日々の業務に取り組んでいます。

そんな管理職ではありますが、少しばかり「これは変だな」「ここは変えた方がいいのでは」と感じることもあります。職員や入所者様が居心地よく、楽しく過ごせる場所にするにはどうすればよいのか。そんなアイデアは次々と浮かび、2年前と比べれば少しずつ変化してきたように思います。小さな歩みではありますが、職員の皆さんにも「変わった」と実感してもらえ、職場にしたいですし、これからも改善と改革を続けていきたいと考えています。

個人的に「変わらないもの」と「変わっていくもの」を考えたとき、「変わらないもの」は“人との関わりで大切なこと”であり、それ以外は時代に合わせて変えていく必要があると思っています。自然環境や生活環境が変化すれば、当然、労働環境にも影響があり、そこで働く職員も対応していかななくてはなりません。ふくろうの郷でも、新しい介護の知識や技術を取り入れ、現場の質を高めていくことが必要です。介護用品や設備も変わっていくでしょう。

一方で、“変わらないもの”は、入所者様が生まれ育った羅臼で人生の最期を迎えられる場所として、町民を支える大切な施設であり続けるという信念です。常に現状に満足せず、より良い環境を目指す姿勢は、生活でも仕事でも大切なのではないのでしょうか。

余談ですが、お彼岸に作る「おはぎ」は、春は牡丹の花にちなんで「ぼた（牡丹）餅」、秋は萩の花にちなんで「おはぎ」と呼ぶそうです。同じものなのに、季節によって呼び名が変わるのは面白いですね。

ところが、この話を知り合いに伝えると、「どっちも同じなら、どっちも“おはぎ”と呼ばせてもらう」とのこと。自分の中で何かが変わった気がしました…。

施設長 米井